

## 岐阜地域に於けるアパレル産業の活性化と大学の地域貢献 ファッションショー「GIFUを着る」の実施を通して

The Activation of Apparel Industry and the Contribution to the regional community by University in  
Gifu Area

-Through the Execution of the Fashion Show "GIFU wo kiru"-

伊藤 陽子 / ITO Yoko  
平 真由美 / TAIRA Mayumi  
久保村 里正 / KUBOMURA Risei

### Abstract

This paper reports the result of the fashion show "GIFU wo kiru", from the viewpoints of the activation of apparel industry and the contribution to the regional community by university. We set targets for this fashion show as follows;

1. Giving this project the status of the collaboration between industry, government and academic, and the practical attempts as the contribution to the regional community by public college.
2. Improving understandings of apparel industries by both college and students who have a hope to get a job in such industries.
3. Supporting student's independence and positivity through planning and managing the fashion show by students themselves.

The construction of this paper is as the following. This paper is contribution for the GIFUarea by university through the fashion show "GIFU wo kiru"

The construction of this thesis is as the following.

The construction

Prologue

I Research background

II Plan ・ Preparation ・ Execution

III Result ・ Consideration

Epilogue

### はじめに

2002年4月11日、岐阜県商工局・デザイン振興室・デザイン振興グループより、『—あなたが企画するオリジナル・ファッションショー「オリベワールド・ファッションシリーズ」』を開催したい旨の相談が本学、生活デザイン学科にあった。その概要は、楽しみながら岐阜アパレルに親しんでもらえるファッションショーを、シリーズで開催しようとするものであり、今まで何度もファッションショーを行ってきた本学科の実績を評価しての依頼であった。

又、本企画はただ単にファッションショーを開催するだけではなく、ファッションショーを自分たちで企画し運営するグループ、ファッションショーに協賛する地元のアパレル企業、そして、そのファッションショーにモデルとして参加する人を募り、それぞれが連携をはかりながら、会場や必要な設備を岐阜県が支援するという企画である。このような企画は現在、大学に

よる地域貢献に取り組んでいる本学科にとっては、非常に意義のある取り組みだと考えた。

とりあえず、企画が持ち込まれた当初の段階で決められていたことは、開催場所としてJR岐阜駅・アクティブGの周辺を利用し、平成14年7月～15年2月までの間に10回程度を開催すると云うことだけであった。そこで本学科としては産・官・学の連携の試みとして、「オリベワールド・ファッションシリーズ」の第一回目を、岐阜市立女子短期大学が主催となって実施することに決定した。

小論は、そのオリベワールド・ファッションシリーズ第一回「GIFUを着る」を通して、大学による地域への貢献を論ずるのである。

### I 研究背景

現在、地方の分権が騒がれ、地方の時代だと騒がれて久しい。

そのことについて経済白書では地方分権について、地方への権限委譲にあわせて、自己決定権と責任を確立すること画重要だと述べている。

今後、地方分権という大きな流れで見ると、機関委任事務制度の廃止、国の関与・配置規制の整理合理化、権限委譲にあわせて、地方公共団体の財政面における自己決定権と自己責任を確立することが重要である。<sup>①</sup>

しかし、この様に自己選択・自己責任といった地方の自立を促すその一方で、地方における産業の衰退は著しく、それに伴う地域経済の停滞・衰退は、地域社会にとって大きな不安となっている。この様な地方をとりまく現状に於いて、自立出来ない地方にとっては、この様な社会的な風潮は、地方の自立ではなく、国による地方の切り捨てだという見方ができるのも、地方都市のおかれた現状を鑑みるのならば、仕方のないことである。

この様な地方都市の多くでは、若年層を中心とした都会への人口の流出が問題となり、地方の将来に対し明るい見通しが立たないのが現状である。これは地方の都市は東京・大阪といったような都会に比べて、行政施策上格段の誤りがある訳ではなく、怠慢がある訳でもない。日本という国家の歴史が長い間作り上げてきた、地方と中央との構造上、仕方のないことであり、地方の努力だけでは、どうしようもないことだと言える。

## 1 地方に於ける大学の役割

この様に将来の都市を支えるべき若年層の人口流出は、土地といった資産しかもたない地方にとっては、大きな経済的な損失だけではなく、その地方の存続に関わる重要な問題である。<sup>②</sup>しかし、この問題に対し地方と都会の関係を抜本的な効果的な施策が存在しないのも事実なのである。この様な地方の閉塞した状況の中で、大学という若者が集まる施設を地方が誘致するのは、都市間の構造を変えることが出来ない現状に於いては、効果的な方法であり即効性も高い。そして誘致が出来ない地方に於いて、地方都市のランドマークとしての公立の大学を設立する事は、大学の本来の目的である教育以上に、地方にとっては重要な意味を持っている。すなわち、大学はそこに存在するだけで地域にとって有形無形の様々な効果を地域へ及ぼしているという考え方である。

しかし現在、大学をとりまく現状は、少子化による志願者の減少、不況による就職率の低下など、必ずしも楽観視出来るものではない。又、この様な問題が即大学の経営に結びつくような私立大学は、常に他より先行して大学改革を行い、より「強い大学」<sup>③</sup>を常に志向している。

この様に私立大学がより強い大学を志向している中で、他の国立大学・公立大学が官立であったとしても、自立出来ない「弱い大学」が淘汰されるのは、やはり仕方のないことなのかもしれない。今現在、計画が進められている国立大学の独立法人化

による改革にしても、やはり全てではないものの私立と同様の視点が一部で含まれており、国公立大学の存在意義については、今後、大きく論じられるべき主題であろう。

しかし、ここで重要になってくるのは、地方都市が構造上、自立出来ないのであるのならば、そこに設置された大学が自立することは、やはり困難であると云うことである。しかも、近年設立された多くの公立大学が、いわゆる街興しの目的があつて設立されたのだとするならば、尚更のことである。若者が流出するのは都市と都市との関係・構造上の問題である。例え、それを歯止める為に大学を作ったとしても、都市構造上の問題が解決しない限り、基本的には地方に若者が集まらないのは仕方がないことであり、何か特別な理由がない限り、大学だけが特別な存在としてあり得るはずもなく、それはむしろ自然な傾向である。

この様な状況がある以上、地方都市にある国立大学、公立大学が強い大学であることは難しい。しかし今後、もし大学の強さによって大学が淘汰されていくのであるならば、それは地方にとって必ずしも望ましいことではないことを確認しなくてはならない。大学がその昔、その地域に設置されたと云うことは、何らかの必要性があつて作られたのである。その原点に立ち返り、原点を見つめなしたとき時に、大学が今も必要であるのかと云うことは重要なことであり、大学の意義にも関わる問題である。そう考えたとき、大学が必要とされるのは、その地域と大学との関わりからでしかあり得なく、「大学の強さ」ではないと言える。特に公立大学の場合には、その成り立ちからしても重要なことである。このことについて清成忠男は、以下の様に述べている。そして、そういう意味では、新たな地域の大学像を、大学自らが作り出して行かなくてはならないのである。

ただ、公立大学は、その性格上、地域貢献を義務づけられていると思われる。地域住民の生涯学習への対応は当然のことであり、また、地域に関する調査・研究には積極的に参加すべきであろう。— (略) —公立大学を地方自治体が丸抱えし続けることは可能であろうか。地域との関わり合いがあいまいなまま公立大学を設立する時代は終わったのではあるまいか。いずれにしても、転換期にあたって、あらためて、地域と大学の関わりが問われなければならない。

④

## 2 大学に於ける地域貢献

清川が述べるように公立大学に於いて地域貢献が義務として存在するのであるのならば、公立の短期大学としても例外ではないだろう。しかし、大学による地域貢献と云っても、その有り様は様々であり、それを一言で云うのは難しい。

大きな枠で考えるのならば先にも述べたように、大学が存在するだけでも地域に貢献出来るという考え方も成り立つ訳だが、それを地域貢献に位置付けるのは、全く意味のないことである。

又、学生に教育を施して地域に有益な人材を輩出するというのも非常に重要であり、地域に貢献をしている訳ではあるが、小論では、やはり従来から教員が義務づけられていた、このような基本的な大学教員の仕事を、地域貢献とはしない立場をとる。そこで小論では大学の教育・研究機関という側面から、地域に対し何らかの直接的な行為の働きかけをもする行為を、今回は大学の地域貢献として定義づけたい。但し、地域貢献、産・官・学の連携と云っても、短大という規模では自ずと限界が出てくることかと思われる。又、このような取り組みを本学ではようやく始めたことと云うことで、地域にたいする直接的な効果は少ないかと思われるが、今後へと繋げていく試行錯誤の段階であると考えるべき。

そこで次章では、伊藤<sup>⑤</sup>が行ったファッションショー「GIFUを着る」の開催を、産・官・学の連携による地域貢献の一例として定義し、その実践事例として、ファッションショーの開催に至るまでの経過記録を、地元のアパレル企業との関係を中心に述べたい。

## II 計画・準備・実施

本章では地域貢献の在り方の例として、産・官・学の連携によって開催されたファッションショー、「GIFUを着る」の記録を述べる。以下に、時系列を追って、ファッションショー開催までの準備の記録を記す。本章の内容は、準備から開催まで全面的に関わった、伊藤の記録を元に構成した。

### 1 目的

今回、ファッションショーの実施を計画するにあたり、以下の目標を設定した。

- ① 今回のファッションショーの企画を、産・官・学による連携と位置付け、公立短期大学としての地域貢献の実践的な試みとする。
- ② 学生が岐阜のアパレル業界へ訪問する過程で、岐阜のアパレル業界について学習を行う。又、地元のアパレル企業に対して、今後アパレル業界へと就職を希望している本学学生と送り出す大学についての理解を深める。
- ③ 学生が主体となってファッションショーを企画・運営する事によって、実践の中から学生の自主性や積極性を養う。

このような目標を設定しファッションショーを実施することとは、実践的教育として考えた場合、効果的な演習課題であると考えられる。又、公立短期大学として考えた場合、大学の中だけではなく、地域の現場に出て実際に体験することによって学生が学ぶと云うことは、地域の特色を活かした地域の大学として、非常に有意義ではないかと考えられる。

そこで、伊藤が担当している「ファッションビジネス演習」

の一環として、「GIFUを着る」に取り組むこととした。

### 2 計画

まず、ファッションショーの準備にあたって、以下のような概要の計画を行った。

#### 1) 地元のアパレル企業への訪問

本年の4～5月に、下準備として伊藤が、あるアパレルメーカーの会長に会い、ファッションショーの趣旨を伝え、ファッションショーへの協力をお願いした。そこでいくつかの問題点が指摘されたので、以下に記す。

#### ① ファッションショーの技術的な問題点

「短大だけでファッションショーをするのは無理なのではないか。ファッションショーは現場だけでも大変だが、その前に、服を選び、それをコーディネートしても、アクセサリも借りなければいけない。衣裳が揃ったとして、それをショーとして見せるためには、演出もいるし、音も、照明も決め、動かさなければいけない。」という意見が出された。それに対して伊藤は「私はファッションデザイナーとして20年前から、何度もファッションショーを行ってきた。その経験とそのときのスタッフが協力してくれる。」と説明を行った。

#### ② 製品とファッションショーの対応について

「岐阜のアパレル企業の服をコーディネートするというが、会社によって提供できる物が違う。春夏の商品のところもあるが、秋冬の商品のところもある。」という意見が出された。そこで、それに対して「今、ファッションはシーズンレスに向かっており、着たい人が、着たいものを組み合わせて着ている様な状況である。春夏物も秋冬ものもミックスしているので、このショーは季節を限定しないショーにしたい。その点に関しては、ショーの舞台構成で、どの様にも対応できる。」と返答する。

#### ③ 製品の提供について

「以前は企業もサンプルとして製作した物を貸し出すことができる体制であったが、現在ほとんど余分の物は持っていない状況である。だから今は必要な物だけを残して、後は売ってしまつて余っている製品は無い。自社製品を貸し出すとなると、現在、サンプルとして展示に持ち出している物を貸すことになる。7月初めは秋冬ものの展示会を、各地で行っている。パイヤーが商品を持って東奔西走している。」という意見が出された。これに関しては、まさに最前線の旬の服を借り受けることが出来るわけなので、その展示に使用している服を借りるという事にした。但し、この商品を借りる為には、ショー当日の朝に借りに行き、ショー終了後すぐに返しに行くことで、ここの企業の場合は対応してもらえる事になった。

#### 2) 会場について

又、交通の便の良い適当な規模のショー会場は、アクティブGのTAKUMI ミュージアムが最適である為、会場として使用する

ことに決定した。そこで会場を借りる為に、アクティブGの担当者の元へ意見を聞きに行った。

アクティブGでは、本企画に賛同され、非常に期待を込めて協力の約束を取り付けることが出来た。又、期間的には7月7日がアクティブGの開場一周年記念日にあたる為、様々なイベントが開催され、客が多いとのことであった。

### 3) 「ファッションビジネス演習」の授業に於いて

#### ① 岐阜アパレル企業の認知度の調査

学生がどれだけ岐阜アパレル企業を認知しているか調査を行った。方法は知っている岐阜アパレル名とブランド名を書き出してもらった。しかし、残念ながら就職の求人が来ている会社を除いては、ほとんど知らない状況であった。

#### ② 岐阜アパレル企業への就職希望調査

岐阜アパレル企業に就職したいと思っている人を聞き取り調査した。授業を受けている学生44名中の30%が、デザイナー、パタンナー、企画、販売等の専門職として岐阜アパレルへ就職を希望していた。

#### ③ 衣服に関する意識調査

学生の衣服に対する関心を調査した。今、自分のファッションについて語れるかを聞き取り調査した。質問内容は「今日着用している衣服のブランド名」、「今日着用している衣服、アクセサリー類の価格、トータルの価格」であったが、この質問に関しては、学生は割合明解に答えることが出来、こだわって、着用衣服を決めていることが分かった。

又、この間にファッションショーへの協力にあたっての聞き取り調査を行い、授業の中でファッションショーを行うことについて、検討を行った。しかし、正式に岐阜県からファッションショーに対する要請が短大にあったのは5月30日であった。

## 3 準備

岐阜県と会場を提供するアクティブGの協議の結果、開催日時は、平成14年7月7日(日)アクティブG開場1周年記念日にあわせて行うことに決定した。又、学校側でもスケジュールを検討した結果、7月は他のスケジュールを圧迫しない事、又、折角行うのならば第1回が良いとの意見が出され、承認された。しかし、この日時では開催まで1ヶ月しかなかった為、非常に過密なスケジュールになってしまった。

#### 1) 協賛企業への呼びかけ

ORIBEシリーズの方針で、企業からの服を借用するのは岐阜県が、援助するという事になった。その為、県の担当者が企業と連絡を取り相談に行ったが、不慣れな為か企業から協力を断られたり、責任ある担当の人と連絡がつかないといった状況で、時間だけが無益に過ぎていってしまった。

そこで困っていたところ、県側からの指導で、県と企業のイベントをよく行っている、専門のイベントコーディネーターが

本件を扱う事になった。しかし、その担当者と相談をしたものの、担当者は今まで自社で行っていた手法にこだわり、企業はそういうことは好まないといい、学校側が意図する「産・官・学の新しい提携」については、あまり理解が得られなかった。しかし、従来のような企業側だけのファッションショーや、ただ企業から借り受けるだけのファッションショーならば、すでに毎年行われている事であり、わざわざ大学が主催として行う意義がないと考え、何度か話し合いを持った。その結果、学校側が直接、企業と交渉が出来るようにしてもらい、県やコーディネーターは可能な限り同席することにした。

#### ① 岐阜婦人子供服工業組合訪問

まず、5月に新任された岐阜婦人子供服工業組合理事長に会見し、今回のファッションショーの主旨、実行予定を話し、産・官・学の提携の申し出を行った。しかし、6月になってしまっている現状では、あまりにも時間がないので、組合は理事会等で、説明、書面を配布するので、学校側から直接各企業へ個別訪問をするように言われる。

そこで組合から協力してもらえそうな企業をあげて貰い、早速訪問を始めることにした。訪問を行うにしても時間がないので、組合で紹介された企業の中で、就職等に於いて交流のあるところを中心に、学校側として訪問したい企業から行うことにした。

訪問した企業と約束は、以下の通りである。

#### ② A社訪問(6月10日、13日、17日、18日 4月中)

A社は生活デザイン学科が卒業生を送っている企業である。ここでは企業内グループの一社を、協力企業にして貰うように約束を取り付けた。但し、現在、冬物として展示している製品を借り受ける事になるので、どの製品を借りるかを選ぶのは早くても構わないが、実際に展示会のスケジュールにより遠方で使用していることがある為、貸し出しはショー前日の夕方か、当日の朝にし、返品はショー終了後か、翌日の朝一番で返却して欲しいとの要望が出された。

又、A社の服はブランド・コーディネートで着ることをコンセプトにデザインされているので、ブランドだけのコーディネートも、当日ショーで見せて欲しいと要請された。この企業では3セットを借り受けることとなった。

#### ③ B社訪問(6月7日、10日、18日)

B社は岐阜アパレル業界の大手企業で、毎年短大へも求人が来ているものの残念ながら近年は就職者がいない。

今回、B社ではデザイナーに会い、ショーの主旨説明を行った。その際、これは良いきっかけなので、リクルートにもなると思ったデザイナーが、私たちを人事課にも案内してくれた。そこではデザイナーも同席して、就職に対して親身になって相談相手になって貰い、貴重なアドバイスも頂けた。B社では製品を借りる事が出来なかったものの、サンプルを借りる約束を

岐阜地域に於けるアパレル産業の活性化と大学の地域貢献ファッションショー「GIFUを着る」の実施を通して

取り付けることが出来た。ファッションショーが開催される7月は、もうすでに冬物の展示会中である為、春夏物のサンプルは無いが、秋物は生産が始まる頃なのでサンプルが多分あるだろうとの事であった。

B社は20日まで企業展を行っているので、その後で衣装をみせてもらうことにした。又、B社の若者用の服は東京で企画を行っているの、そちらにも問い合わせ貰うように取り付けることが出来た。又、B社では「ファッションショーで44セットを作るのならば、150商品位は必要でしょう。そのうち、8セット30点位は用意できるようにしましょう。」と言って貰えた。

しかし、組合からの協力依頼のパンフレットが会社の上層部には届いていなかったようで、今回は現場から企業の上層部へお願いする形になってしまった。その為、パンフレットがなかなか届かないと云う事もあって、依頼に行ったデザイナーの方々には苦勞をかけてしまった。今までの慣例では、この方法で良いはずと云う事であったが、ショーまでの期間が無い為、待つのが辛かった。

④ C社訪問訪問 (6月10日)

C社からは毎年、短大へ求人を出して貰っているものの、就職希望者が少なく、なかなか要望に答えられないでいるので恐縮するが、快く検討する旨の返事を貰う。C社は受注生産もあるので、借り受けたものを選んでから相手の企業の下承を得たりする時間が必要との事であった。春物が提供できるということである。

⑤ D社訪問 (6月10日)

D社は毎年、生活デザイン学科の学生が就職しており、本年もすでに一人が決定している。D社では好意的に対応され、更に求人もし出された。又、打ち合わせの間に、D社からインターシップの協力についても相談があり、今後、検討する事になった。ここは、アンテナショップを運営しているので、その商品を25点提供してもらえる。

⑥ E社訪問 (6月11日)

E社は就職指導などで短大がお世話になっている企業である。訪問した際もそうであったが、貸し出し出来る製品は、ショールームに展示中ものだけなので、直前に借り受けに行く事になった。E社側で6月21日までに製品を用意する事となり、冬物のメンズを10点提供して貰える事になった。又、E社も季節ごとに製品を売り切っている為、サンプルを貸して貰い、8日にチェックをして、9日に返却するようにした。

⑦ F社訪問 (6月11日)

F社は問屋町にある会社で、「貸し出し出来る製品はミセス物ですが良いですか」と、言われた。又、7月7日は問屋街で、はんば市が開催されるので、そこで、すべての商品を売り切ってしまいたいそうである。しかし、商品を貸し出して

いるということは、借りた商品は、その日に売ることが出来ない、売れ残ってしまうことになる。そういう意味では、貸し出す側にとっては、非常に都合の悪い日に当たってしまった。

しかし、ありがたい事にF社では5~6点を貸し出して貰える事になった。借りられる製品は普段、営業担当者がサンプルとして持ち歩いている商品なので、朝、電話で確認を行い、その日の午後に借りに行くことになった。

⑧ G社訪問 (6月11日)

岐阜のアパレルの中には大きな企業もあるが、駅前の問屋町だけで店を出しているところもある。そこを訪問しようと駅前を歩いている時、ウインドディスプレイに興味をもち、一緒に協力してもらいたいと思う店に出会った。同行者は今まで使ったことのない店で知らないから頼みに行くのは難しいと言われたが、伊藤が店の中へ入りお願いすると快く協力しようという返事が得られた。この店の主人の娘さんが短大被服学科の卒業生ということもあり、非常に好意的であった。

この店では春夏物が店頭に並んでいたが、店先の商品を借り受けるのならば直前に取りに来て欲しいとのことであった。又、在庫のある冬物ならば、いつでもいいからとりにおいでと言われたが、学生は春夏物でコーディネートをしたいとの事であった。

⑨ H社訪問 (6月11日)

H社は問屋町にあるビルの地下1階の店である。以前問屋町を廻った時にも、立ち寄って話を聞いていた店であった。店の品揃えはミセス物であるが、学生がその服をファッションショーに使うのは面白い企画だと興味を持ってもらえ、気持ちよく貸し出しを、承諾して貰う。又、「他の店にも声をかけなよ。協力してくれるよ。」と言われた。

⑩ I社訪問 (6月14日、18日)

I社は貸し出し用の製品を持っていない為、貸し出してしまった商品は、後で売り物にはならないと言われた。しかし、I社は事業部制なので、その商品を本部の総務が買い上げてくれるのならば貸し出せるので、会議にかけて決定したいとのことであった。返事は6月18日に出すと言われたが、結果的には総務からの了解が得られ、貸し出して貰えることとなった。

2) ファッションビジネス演習の授業として

① 授業 (6月3日)

ファッションショーの開催を、岐阜県が決定したのを受けて、ORIBE ワールド・ファッションシリーズの説明を行った。主な説明内容は、以下の通りである。

a) これは、岐阜地域のアパレル企業の服を用いてコーディネートを行い、学生と同年代の若者が着たいと思う服の組み合わせ(セット)をつくり、それを使用してファッションショーを開催する。

b) 準備日は7月6日(土)とし、7月7日(日)の開催日に、

計2回の公演を行う。

- c) 場所はアクティブGのTAKUMI ミュージアムで開催する。
- d) ファッションショーの出演は、学生とプロのモデル10人<sup>⑧</sup>で行う。
- e) ファッションショーでモデルが着用する服のコーディネートは学生が行う。
- f) 運営、照明、音、舞台作り、舞台デザイン、ナレーター等の裏方の作業は全て学生で行う。
- G) ファッションショーのタイトルは「GIFUを着る」とし、本日より準備に入り、その作業日誌を作成する。
- H) 毎日午前、午後、夕方の3パートに分けたウィークリーの表を作成し、今日から当日までの授業、サークル、アルバイトなどの予定と、企業訪問を出来る時間を、その中に記入してもらう。そして、それを基に全体の一覧表を作成し、ファッションショー実行委員会の行動基礎表とする。(図1)(図2)そして、これら行動表当の記録管理は平<sup>⑨</sup>が行う。

AD1 井上ゆかり									
月	火	水	木	金	土	日			
6月10日	午前 CAD	午後 英語	午後 卒研	午後 卒研	午後 卒研	午後 バイト	午後 バイト	午後 バイト	午後 バイト
6月17日	午前 CAD	午後 英語	午後 卒研	午後 卒研	午後 卒研	午後 バイト	午後 バイト	午後 バイト	午後 バイト
6月24日	午前 CAD	午後 英語	午後 卒研	午後 卒研	午後 卒研	午後 バイト	午後 バイト	午後 バイト	午後 バイト
7月1日	午前 CAD	午後 英語	午後 卒研	午後 卒研	午後 卒研	午後 バイト	午後 バイト	午後 バイト	午後 バイト

図1 学生行動表

学生 動きの日									
AD	月	火	水	木	金	土	日		
6月10日	午前	午後	午後	午後	午後	午後	午後	午後	午後
6月17日	午前	午後	午後	午後	午後	午後	午後	午後	午後
6月24日	午前	午後	午後	午後	午後	午後	午後	午後	午後
7月1日	午前	午後	午後	午後	午後	午後	午後	午後	午後

図2 行動基礎票

- ② 授業 (6月10日)
- a) ファッションショーの企画を各自で立案し、企画書を書く。
- b) 「GIFUを着る」について周知徹底をはかる。
- c) ミセスのアパレル製品を、若者の着る服としてコーディネートをするので、どのようなコンセプトでコーディネートを行うか検討する。
- d) 授業履修者44名、全員が、必ず一人、1つのコーディネー

トを行う。

### ③ 授業 (6月17日)

- a) 今回のファッションショーの協力者である沖<sup>⑩</sup>を授業に講師として招き、ファッションショーへの理解を深める為に、ファッションショーの舞台について説明を行った。沖より、舞台の構成、舞台に専門用語、効果的な舞台の使い方、音楽、照明などの説明を受ける。(図3) 又、沖はプロのモデル経験者なので、モデルとしての見せ方、ウォーキングについての注意、実践をうける。



図3 「沖による指導風景」

- b) 衣装提供に協力して貰える企業も、ほぼ決定しつつある為、今現在で決定している企業の表を作成し、学生に自分の訪問したい企業のところへ記名させ、一覧表を作成した。又、この日は、発注の関係上、県と短大の間に入る企画会社が来学し打ち合わせを行った。

### 3) 実施要領

学生によるファッションショーの準備と平行して、正式にファッションショーの企画書(図4)(図5)を作成し、短大へと提出した。又、本企画書は、その後の広報活動、企業訪問の趣旨説明にも使用した。

企画書の要旨は、以下の通りである。

#### ■企画名

第1回 オリベワールド・ファッションシリーズ  
GIFUを着る〈GIFU wo kiru〉

#### ■主旨

現在、地方の時代と云われて久しいが、実際には地方の活力というものが衰退傾向にある事は否めない。そのような状況の中、岐阜県が支援するオリベワールド・ファッションシリーズの初回を、岐阜市立女子短期大学が地元の企業の協賛を得て行うという事は、今後の地域と大学と企業との関係を占う意味でも非常に重要な取り組みである。

本企画は行政と大学が連携し、地元のアパレル業界に注目を集

## 岐阜地域に於けるアパレル産業の活性化と大学の地域貢献ファッションショー「GIFUを着る」の実施を通して

め、活性化を意図した企画である。そして、本企画を契機に、今後どのような形で岐阜のアパレル企業と短大とがお互いの理解を深め、産・官・学が、より良い形で提携できるかを模索し、実践していきたいと考える。

### ■大学と産業との関わり

ファッション都市岐阜の産業であるアパレル企業の製品を、短大の学生が、「自分が着用するファッション」と、とらえたとき、どのようなコーディネートを行うのであろうか。例えば、学生の岐阜アパレル製品に対する理解度は、どれだけあるのだろうか。GIFU ブランドに対する知識はどれだけあるのだろうか。おそらくコーディネートを行うという過程において、学生にとって岐阜アパレルに対して様々な課題が生じてくるかと思われる。そういう意味では、地元の公立短期大学として授業の一環に様々な課題を取り入れるということは、ショーを公開して地域に向けて発信するという事だけではなく、企業への訪問、ブランド研究等を通じて、地元の企業とその商品に対する啓蒙を行うといった意義をもってくるかと思われる。又、この様な地域の社会・企業に学生が飛び込み、実践すると云う事は、地域社会の活性化にも繋がる事が期待される。

そして更に企業側にとっても、この様な岐阜県内のアパレル産業の啓蒙による活性化への期待だけではなく、ファッションショーを通じての自社製品の宣伝、学生との関わりの中から若者の市場調査、優秀な産業の後継者の育成・確保を行う事が可能であり、現段階では非常に小さな活動ではあるが、今後、相互にとって大きな活動に繋がっていくのではないかと期待される。

### ■ファッションショーの方法

まずはファッションショーの準備段階として、岐阜市立女子短期大学、生活デザイン学科の学生がファッションビジネス演習の一環として岐阜アパレル企業を訪問し、県内のアパレル企業の製品に直接触れることによって、その品質・デザインを体験し、その製品を借りうけコーディネートする素材とする。そして次に、借り受けた県内の企業の様々なアパレル製品を学生がコーディネートして、若者の着るGIFUをショーで演出し行う。又、実際のショーの運営に関しては、学生を主体として行うことを基本とするが、数名の専門技術者やプロモデルの協力を得ることによって、教育面の配慮と共に、ショーとしてのクオリティの高さをも意図した企画となっている。

#### 4) ポスター及びチラシの制作

ポスター及びチラシの制作は久保村<sup>⑨</sup>が担当した。外部へ注文する時間の余裕がなかった為、久保村が一人一人の学生の顔をデジカメで撮影し、44名の学生の顔写真を用いてチラシのデザインを行った。ポスター、チラシの制作に関しては、専門の教官と機材があった為、容易に進めることが出来た。結果的には非常にユニークであり、その上インパクトの強いデザイン

### GIFUを着る 〈GIFU wo kiru〉

第1回 オリベワールド・ファッションシリーズ

演出・構成 伊藤 陽子 岐阜市立女子短期大学

期日  
平成14年7月7日(日) 午後2回

場所  
アクティブG TAKUMI ミュージアム

参加  
岐阜市立女子短期大学 生活デザイン学科 学生

主催  
岐阜市立女子短期大学

後援  
岐阜県

協賛  
株式会社いずみドレス、株式会社ガゼール、株式会社サンラリー  
株式会社マツバラ、シンガポール株式会社、美濃屋株式会社  
(アイウエオ順)

現在、数件交渉中

お問い合わせ

〒501-0192 岐阜県岐阜市一日市場北町7-1 岐阜市立女子短期大学  
生活デザイン学科 ファッションデザイン研究室 伊藤陽子  
TEL: 058-296-3131 / FAX: 058-296-3130 / E-mail: yok@gifu-cw.ac.jp

図4 「GIFUを着る」企画書

### GIFUを着る 〈GIFU wo kiru〉

第1回 オリベワールド・ファッションシリーズ

**主旨**  
現在、地方の時代と云われて久しいが、実際には地方の活力というものが衰退傾向にある事は否めない。そのような状況の中、岐阜県が支援するオリベワールド・ファッションシリーズの初回を、岐阜市立女子短期大学が地元の企業の協賛を得て行うという事は、今後の地域と大学と企業の関係に古く意味でも非常に重要な取り組みである。

本企画は行政と大学が連携し、地元のアパレル業界に注目を集め、活性化を意図した企画である。そして、本企画を契機に、今後どのような形で岐阜のアパレル企業と短大とがお互いの理解を深め、産・官・学が、より良い形で提携できるかを模索し、実践していきたいと考える。

**大学と産業との関わり**  
ファッション都市岐阜の産業であるアパレル企業の製品を、短大の学生が、「自分が着用するファッション」と、とらえたとき、どのようなコーディネートを行うのであろうか。例えば、学生の岐阜アパレル製品に対する理解度は、どれだけあるのだろうか。GIFU ブランドに対する知識はどれだけあるのだろうか。おそらくコーディネートを行うという過程において、学生にとって岐阜アパレルに対して様々な課題が生じてくるかと思われる。そういう意味では、地元の公立短期大学として授業の一環に様々な課題を取り入れるということは、ショーを公開して地域に向けて発信するという事だけではなく、企業への訪問、ブランド研究等を通じて、地元の企業とその商品に対する啓蒙を行うといった意義をもってくるかと思われる。又、この様な地域の社会・企業に学生が飛び込み、実践すると云う事は、地域社会の活性化にも繋がる事が期待される。

そして更に企業側にとっても、この様な岐阜県内のアパレル産業の啓蒙による活性化への期待だけではなく、ファッションショーを通じての自社製品の宣伝、学生との関わりの中から若者の市場調査、優秀な産業の後継者の育成・確保を行う事が可能であり、現段階では非常に小さな活動ではあるが、今後、相互にとって大きな活動に繋がっていくのではないかと期待される。

**ファッションショーの方法**  
まずはファッションショーの準備段階として、岐阜市立女子短期大学、生活デザイン学科の学生がファッションビジネス演習の一環として岐阜アパレル企業を訪問し、県内のアパレル企業の製品に直接触れることによって、その品質・デザインを体験し、その製品を借りうけコーディネートする素材とする。そして次に、借り受けた県内の企業の様々なアパレル製品を学生がコーディネートして、若者の着るGIFUをショーで演出し行う。又、実際のショーの運営に関しては、学生を主体として行うことを基本とするが、数名の専門技術者やプロモデルの協力を得ることによって、教育面の配慮と共に、ショーとしてのクオリティの高さをも意図した企画となっている。

図5 「GIFUを着る」案内プログラム、



ポスターが出来上がった。(図 6) そして、このデザインは、以後、岐阜県が制作し配布するチラシ、学生が制作する台本等の表紙を飾ることとなった。又、この時点では協力企業名は、まだ完全には決定していない為、決定次第、入れていくことにした。



図 6 ポスター・チラシのデザイン

#### 5) 企業訪問と商品の選択

まず、学生が企業へ商品を借りに行くにあたり、こちらの企画書、依頼書、学校案内を持参せし、きちんと説明するよう指導を行った。又、借り受けた製品は非常に大切な物なので、企業を訪問した学生を製品の管理人にし、すべての管理責任を持たせた。そして、借り受けた製品は必ずデジカメ撮影し、その写真を添付した表にタグの情報、色、型、サイズの特徴等をすべて書き入れ、企業ごとのファイルをつくらせ、借用衣服の管理を徹底させるようにした。

そして、これらの指導を徹底させた上で、学生に各企業へ製品の借り受け・選択に向かわせた。

##### ① D社訪問 (6月20日)

13時より、伊藤と学生Aは企業訪問を開始した。雨の中、迎えに来た企業の車と教官、学生の車に分乗し、学生15名はD社の路面店へと向かった。

今回の服の選択に関しては、まず学生に服を自由に選ばせるようにした。なぜなら、この店は企業Dの市場のニーズを調査

する為の路面店なので、学生がどのような服を選ぶか、企業側としても非常に注目をしていたからである。この店には自社製品と、この店の店長が世界各国を廻って買い付けてきた製品とが一緒に並べてある。そして、市場調査を行い、もし買い付け商品の中に、評判が良い製品があれば、そのデザインを研究し、自社製品に反映していくシステムとなっている。そういう意味では、今回の学生による商品の選択は、企業にとっても良い市場調査でもあったのである。

この店の建物全体はD社の本社と同じ、ニューヨークのデザイナーが設計しており、試着室も大変夢がある設営になっていた。学生たちは、ここで実際に部屋を使用したり、写真をとったり楽しんでいた。この店は、店の雰囲気、ディスプレイの方法、空間のデザイン等、とても学生たちの好みをとらえており、学生は楽しんで商品の選択を行った。(図 7)

しかし、学生による商品の選択が終わってみると、学生たちが選んだ服は、残念ながら買い付け商品が多いことが分かった。そこで2度目はタグの見方を教えてもらい、店の商品の中から、D社の製品だけを選ぶことにして、再び選択を行った。

ここでは15名が選んだ衣装をそれぞれカメラに収め、後でその中から、提供を受ける25点を学生全員で選ぶことにした。そして16時過ぎ、別のグループが次の企業訪問先へ行く予定になっていたので、このグループは解散とした。



図 7 D社アンテナショップ訪問

##### ② A社訪問 (6月20日)

解散後、伊藤は短大へ戻り、4名の学生と共に、17時に企業Aを訪問した。ここでは商談室へ通され、そこにディスプレイしてある商品の中から選んで、3セットを組み合わせで選ぶことにした。学生は社長から説明を受け、その後、2人のデザイナーが学生たちの補助についてくれ、衣装の選択を手伝ってくれるようになった。

服選びに関しては、すべて学生が主体となって行った。学生は衣装を見て選択し、学生がマネキンの着用している「このズボンが欲しい」と言えば、補助についたデザイナーがマネキンからはずしてくれ、学生が組み合わせに困っていると、デザイ



岐阜地域に於けるアパレル産業の活性化と大学の地域貢献ファッションショー「GIFUを着る」の実施を通して

ナーが奥からディスプレイされていなかった小物などを出しにくれた。今回は、二人のデザイナーに手伝ってもらったが、二人とも根気よく学生の迷いにつきあい話をしてくれたようである。

こうして最終的に学生は、3セットを組み合わせてたり、取り替えたりしながら、ボディへ実際に衣装を着用させて写真を撮影した。今回、D社にきた4人の学生は、ここへ全員の代表として来ている意識がきちんとあり、色々なコーディネートをしてしながら、他社製品とも組み合わせられるものを選択していたようである。又、ショーの中で3セット衣装を見せたときも考慮し、ハーモニーがよいように工夫をしていた。

今回、学生が服の選択をしていたのは商談室であった為、2組の業者がA社と商談する場面も見られ、学生たちにとっては現場の空気に触れられ大変勉強になったようである。又商談室には今シーズンの売りたい商品がテーマごとに飾られており、シーズンのファッション・マップも掲げられているため、授業でも作成してきている物の、現実の姿に学生たちはしばしばそれらの前で見入っていた。そういう意味では、この企業を受けたい学生もいるので、大変、良い勉強になったと思われる。

こうして17時過ぎに、ようやく学生は納得して短大へ戻った。この商品は、前日の夕方か、当日の朝に借り受けになる為、写真を特に念入りに撮った。

### ③ E社訪問 (6月21日)

E社からの連絡があり、展示会中なので中へは入れないが、急ぐであろうから、E社から貸し出せるものをまとめるのと事であった。E社の展示場は返品に来たとき見せるので、とりあえず取りに来るよう言われ、学生3名がE社へと向かった。学生は箱一杯にアウター4点、シャツ6点、カットソー9点、ルーズパンツ7本、細身パンツ6本の合計32点を借り受けてきた。そして学生が短大へ戻ると、県のアドバイザーより借り受け商品の管理方法について指導を受けた。

### ④ G社、H社、F社訪問 (6月22日：午後)

問屋街の企業を訪問した。この三社の店はミセス向けの店であるのにもかかわらず、学生たちは自分たちも着たいものがあると、問屋街に対して親近感を持ったようである。

岐阜の問屋街はビルの中に小さな商店がぎっしり入っており、学生は町中の「通り抜けできます」と書かれている看板を不思議そうに眺めていた。又、問屋街の中にはアーケードのあるストリートの店や、洒落た店を構えているところも多く、学生と一緒に、あちこちを興味深く見て廻った。

今回、商品を貸し出してくれた店の人達は、ミセス対象の商品を若者がどのようにコーディネートして見せてくれるかに、とても興味を持ち、期待してくれたようであった。今回、訪問した3社は、すぐに借り受ける事は出来なかった為、丁寧に写真を撮り記録を残した。今回の訪問で企業Hから3点、企業Fから5点借り受けることを約束した。両社へは、7月1日に借

り受けに行くことになった。

### ⑤ ファッションビジネス演習 (6月24日)

ファッションビジネスの授業で、学生の一部は伊藤と共に企業を訪問した。一部は平と今現在、借用している服と、今後、借りる約束をした服のデータを整理した。整理の方法は商品1点につき写真1枚をデジカメで撮影し、その写真をプリントアウトし、そこへ商品のデータを書き入れることにした。その際、全体の通し番号つけと、企業ごとのグループ分けも行う。

### ⑥ I社訪問 (6月24日)

12時30分に集合し車へ乗し、学生10名とI社を訪問した。ここには学生の友人がデザイナーとして就職しているというので楽しみにしていたが、残念ながら、その人とは出張中で会えなかった。学生はI社の1階の商談室や、2階のショールームが珍しいらしく感激しており、アパレル企業を訪問している、と云う実感が湧いてきた。I社の製品はドレスが多いので学生がどう反応するか多少、心配したが、非常に喜んだようで衣装を選び試着を行った。試着の際、学生はGパンの上にナイロンのふわふわしたドレスを着たが、それが意外と格好良かった為、すぐにコーディネートの案が浮かんだ。

この企業は貸し出した服は売らないということなので、学生の中で貸し出した服を欲しい人がいれば、後から格安で販売してくれると言ってくれた。その時は、学生は喜んでみたいのだが、実際にはファッションショーで着用したら満足してしまったようで購入した人はいなかった。

14時15分、次の企業を訪問する時間が決まっていたので、学生たちは、ジャケット1点、トップス1点、スカート4点、ドレス12点を借り受け、短大へ戻り、商品の一覧表の作成にとりかかった。短大に戻ると、借りてきた衣装を見た学生の中には、「私も、その企業へ行きたかった」と言い出す者もいた。そこで「もし、もう一度訪問できるのなら行きましょう。」と提案した。しかし、結局は時間の余裕がなく実現しなかった。

### ⑦ B社訪問 (6月24日)

14時30分にB社の前で、短大からバスで来る学生5名と待ち合わせた。この企業は、まだ会社としての了解が得られていなかったのだが、その返事を待っている時間がなかったので、現場のデザイナーの取り計らいで訪問することにした。打ち合わせは展示商談室で行うことにしたが、商談中の客がいるにもかかわらず、快く対応してくれた。

又、今回の訪問はリクルートも兼ねていると云うことで、人事の担当者も同席することになった。この時、学生たちは自己紹介を行ったが、後になってB社は、すでに今年も求人が終わっていたにもかかわらず、再びデザイナーの求人を送ってくれた。おそらくB社の人事担当者は、訪問した際に5名をきちんとチェックしていたのであろう。しかし残念なことに、今回は求人に対し応募者がいなかったためB社に対し、申し訳なく思

った。

学生たちはB社のショールームに展示してある製品を持ってきては、デザイナーに相談をしながらコーディネートをしたり、気に入った製品を単品で色々と集めてくる。ここで借り受けた製品は秋冬物で、ブラウス5点、セーター1点、コート1点、ジャケット5点、スカート11点、ズボン7点の合計30点であった。訪問時、B社は展示会中であつた為、借り受けは後日と云うことになった。そこで今回は製品の写真を撮っただけで、学生は学校へ戻りコーディネートのお組み合わせ表を作ることにした。製品の借り受けは6月27日以降、B社が貸し出しを了承したブランドから、電話が入り次第、順次取りに行く事になり、最終的にB社からの借り受けが終わったのは7月5日(金)であつた。

#### ⑧ C社訪問 (6月26日)

C社より17時30分に来て欲しいという連絡があり、学生4名と訪問する。C社は、いかにもアパレル企業と云った感じの会社であり、社内の別棟に入ると1、2階とも天井を覆うパイプから、ぎっしりと製品が下がっていた。(図8) 製品は同一デザインのものの、サイズ違い、色違い、が数枚ずつ並べられ整理されていた。学生は、そこから借り受けする製品を選択する訳だが、C社の社員より、横のハンガーラックにかかっているものは出荷待ちの商品だから、触らないようにとの注意があつた。



図8 C社ハンガーラック

C社での貸し出し方法は、並べられた製品の中から、学生がショーで使う製品を選び、その製品の品番を企業に申し出ると、その製品の貸し出しが可能かどうかを調べて貰い、後日返事がくる事になっていた。これはC社が自社製品ばかりではなく、東京などのメーカーの製品を生産をしている為であり、貸し出す為には、調整が必要となってくるからである。ここでは11点を選び、後日、その内の6点の借り受けが了承された。そこで7月3日C社へ製品の借り受けに行き、ショー終了後の月曜日から火曜日に製品を返却する約束をした。しかし、借り受けを

約束した製品の内、1点はMサイズが無くなり同一商品のLサイズを、もう1点は黒色が無かったので紺色を、代用品として借り受けることになってしまった。

#### ⑨ コーディネート計画

借り受けが進むにつれ、製品の実物や写真が揃ってきたので、借り受け作業と平行して、学生にコーディネートを開始させた。その際、伊藤は「一人1コーディネートを行う。」「同じ企業の商品で上下を揃えての組み合わせは行わない。」「1つの商品をつかうのは2回までとする。」「の、三点の指示を行った。

#### ⑩ G社訪問 (6月28日)

伊藤と学生3名は、G社へ製品を借り受けに行った。その時、学生が試着を繰り返しながら製品を選んでいると、それを見た店の人が、「ミセスもの製品でも若い人が着ても良く似合う。」と言われた。又、重ね着をしたり、ベストをブラウスとして着用するのを見て、「そういう着方もあるのか。」と学生の着こなしに興味を持たれていた。

今回G社より、ベスト4点とブラウス2点の借り受けを約束し、7月1日(月)に行くことにした。

#### 6) ファッションショーの構成

製品の借り受けが進み、それに平行してコーディネートも進んだのを受けて、ファッションショーの構成を考えるよう、学生に指導した。

#### ① 6月17日(月)

学生は企業を訪問後、服を借り受けて管理し、コーディネートを行いながら、徐々にファッションショーを組み立てていかなければならない。そこで先ず、ファッションショーに必要な役割を挙げ、その中で学生に自分がやりたい役割を選ばせ、表を作成した。

必要な役割は当初、「モデル」、「フィッター」、「スタイリスト」、「照明」、「音響」、「進行」、「ナレーター」、「パンフレット制作」、「記録」が挙げられたが、作業が進行していくに従って、「演出」、「構成」も学生が出来る判断し、担当を決めさせた。又、「プログラム制作」、「広報」、「受付」、「会場案内」、「台本制作」、「データ管理」の役割も必要となり途中から加えた。

これだけ役割が多いと、二年の学生44名だけでは仕事がまわりきらないので、フィッターはチーフだけを2年生にし、後の13名は「アパレルデザイン論」を履修している1年生に依頼することにした。又、モデルの人数も予算の関係で、プロに依頼する人数が6名になったので、2年生11名に1年6名を加えることにした。

#### ② 6月18日(火)

沖より、過去、伊藤が行ったファッションショーの台本がFAXで送られてきた。学生に資料として渡し、これを参考にファッションショーの組み立てを考えさせた。

#### ③ 6月26日(水)

岐阜地域に於けるアパレル産業の活性化と大学の地域貢献ファッションショー「GIFUを着る」の実施を通して

ファッションショー用にコーディネートした、スタイル画を描かせた。そして、その絵に商品の企業名、通し番号を書かせた。又、このスタイル画には、靴、バック、ベルトやネックレス等のアクセサリも、全て描かせた。

④ 6月27日(木) 午前

昨日、学生がコーディネートをした資料を演出係がまとめ、その全体のコーディネート分類を行った。又、すでに借り受けた製品はコーディネートを行い、組み合わせた衣装はハンガーラックにシーンごとに架けていき、ショー全体の流れを確認した。又、学生は自分がコーディネートした衣装を着用して、それをデジカメで撮影をし、台本を作る際の材料とした。(図9)



図9 コーディネート衣装の着用

⑤ 6月27日(木) 午後

沖が来学した。沖は学生たちと一緒に、シーンに合わせて、ショー用にコーディネートの分類を行った。

その際、プロモデルの着用部分と、学生モデルの着用部分に分け、学生モデルは自分がコーディネートした衣装は、自分で着用することにし、必要があればもう1セット着ることにした。又、プロモデル6名は、構成ブロックごとに、何度も着替えてみせることにし、学生の部分とプロモデルの部分は演出に差をつけることにした。

演出はプロモデルが一人ずつで進み見せるのに対し、学生モデルは集団で見せることにした。このようなことを沖と打ち合わせながら、コーディネートした衣装をデジカメで撮影する。

(図10)



図10 演出構成表

⑥ 6月28日(金)

今回は、このように準備に時間のないファッションショーである為、当初、沖に、ショー構成、プログラム作り、音作り等、すべてを依頼する予定であった。そこで沖は、早速、昨日撮影したデジカメの写真で、ショーのプログラム構成をして送ってきたが、学生は自分たちのファッションショーなので、出来ることは自分たちで計画し、実行したいと云う気持ちが強かった。その為、学生たちの意志を尊重し、この日より伊藤は、コーディネート、演出などのアドバイザーという役割に徹し、全てを学生に任せることにした。

おそらく、沖に依頼をすれば、見た目にも美しい、素晴らしいファッションショーを作ってくれるかと思う。一方、学生が作れば、ファッションショーは稚拙な物となるかもしれない。しかし、学生の作るファッションショーは、稚拙であっても、その中に溢れる喜びとエネルギーが感じとれるのではないかと考えた。今回のファッションショーは、企業が行うのではなく、学生が主体となって行うショーである。例え、失敗したとしても、教育の面から考えるのであるのならば、学生の主体性に任せるのが正しいのではないかと考える。プロに任せきりで、ファッションショーをきれいに作ったとしても、後で学生たちが、自分たちのファッションショーと言う気持ちが残らなくては、教育としては意味がないのである。

そこで折角手弁当で協力してくれるつमりの沖には悪いが、状況を説明し、学生の補佐役として手伝ってくれないかと頼み、了承を得た。

ファッションショーが間近に迫り、伊藤は会場のアクティブGとの打ち合わせ、県との打ち合わせ、企業との最後の調整に出かけた。又、岐阜県知事代理新家氏が、学生の健闘ぶりを見学、激励に大学に来られた。

⑦ 広報活動

予め開催の案内を送っておいいたマスコミ各社から、ファッションショーの開催が迫り、その関連記事が掲載されるようになった。

- a) 6月28日(金) 織研新聞、「駅でファッションショー」岐阜県、産官学の取り組み。
- b) 7月1日(月)「地元アパレルと提携、7日にショーを開催」岐阜市立女子短大
- c) 岐阜県がポスターの絵を使用したチラシを作成し、県の広報へ配布を行った。短大側も企画書を市の広報へ配布を行った。

## 4 実施

### 1) 演出・構成

演出・構成は3名の学生が担当した。学生は連日遅くまで残り、ショーの組み立てや全体のまとめを行った。当初この作業は3名の学生だけが、ショーに対する責任感から必死の思いで



活動していたが、6月の末頃から、3名の活動を見て友人たちが自主的に協力するようになり、ショーの直前になって、ようやく構成が出来上がった。その決定したショーの構成は、以下の通りである。

- i) オープニング
- ii) ヒップホップ
- iii) スポーツカジュアル
- iv) ミセスファッションのヤングコーディネート
- v) キュートからフォーマルへ
- vi) ドレスの普段着化
- vii) ゴージャス

この様に、ショーの構成を7つに分類し、企業から借り受けた135点の製品によって、学生が57セットのコーディネートを行った。

## 2) スタイリスト

スタイリストは2名の学生が担当した。しかし、今回のファッションショーはプロが行っている訳ではないので分業が確立されておらず、衣装をコーディネートした学生とスタイリストの感性が対立する場面もあったが、コーディネートした本人の意思を尊重する方向で意見がまとまった。尚、アクセサリ類は、コーディネートした本人の持ち物か、伊藤が所有していた物を用いた。

## 3) 音響

音響は4名の学生が担当し、ファッションショーの際に用いるBGMの選択を行った。(図11)又、ファッションショーの当日は、ミキシングを担当した。



図 11 音響係

## 4) 広報

広報活動は6名の学生が行った。担当の学生は広報活動の一環として3つの番組に出演し「GIFUを着る」の宣伝を行った。

今回、役割分担を決めた際、自分の希望する役割を選択させ決めた為、広報を希望した学生は、マスコミ関係に興味を持っている学生がいる一方で、比較的、楽な仕事として選んだが学

生がおり、後者の学生は、ラジオやテレビに出演してショーについて説明するにしても、実際に企業訪問や服選びやショーの制作を経験しておらず、本番前になって困惑したようである。又、その様子を見た今まで一生懸命ショー作りをしてきた学生たちは、「いい加減に話されてはたまらない」と心配をしていたが、今までショーの制作に関わってきて詳しく知っている学生たちは、他の仕事が忙しく出演できないといった状況であった。

結局、説明を担当にすることになった学生は、今までの作業を体験していないと説明が出来ないので、出演の直前になってから、どこか企業訪問をしたいと伊藤に言ってきた為、急遽、路面店へ連れて行き、実際に体験をさせることになった。又、今まで怠けていた学生は、演出を担当している人達の仕事を見て、今までの作業が、いかに大変だったかを知ったようである。

そして実際の出演の打ち合わせ時には、気楽に構えていた学生も伊藤が司会者に説明するのを聞いたり、リハーサルを見学して、今までの仕事の大変さや広報の仕事の重大さを感じ取ったようで、本番は学生たちだけで無事、済ませることが出来た。今まで、主体的に参加してこなかった学生にとっては、良い勉強になったのではないと思う。

## 5) 学生モデル

学生モデルを担当したのは、2年生が11名で、1年生が6名であった。2年生は自分のコーディネートをした衣装を中心に着ることになり、1年生は、モデルをしていない2年生がコーディネートした衣装を、一人1～2を着ることにした。(図12) モデルを担当した学生は、何度も実際に衣装を着用し、アクセサリをつけウォーキングの練習を念入りに行った。



図 12 学生モデル

## 6) フィッター

フィッターを担当した学生は、2年生が1人で、1年生が13名であった。1年生には、まずフィッターの仕事と役割の説明を行った。学生モデルは原則として自分で衣装を着ることにしたが、一応、学生モデル2人に対してフィッターを1人付ける事にした。又、プロモデルには必ず1人に専任のフィッターを

## 1人付ける事にした。

今回、プロモデルは一人で6回も着替える事になっていたが、学生はその仕事の手際の良さに驚いていたようである。又、自分が普通では見られない現場で働いていることの緊張感や、自分が今回のファッションショーにとって重要な役割を担っている自負心が、1年生にとっては非常に良い経験になったようである。

## 7) 台本制作

今回、台本を制作する学生は7名であった。基本的に台本は、演出が決定しないと制作を行う事が出来ないのので、前の仕事が遅れてくると、作業の開始が先延ばしになってしまい、なかなか制作に入れなかった。しかし時間的に、待つことが出来なくなったので、取り敢えず内容が決まっているところから、制作を行うことにした。

台本制作は先ず製品をコーディネートして写した写真を貼ることから取りかかった。しかし写真だけで、まだ現物が届いていないコーディネートもあり、その場合は企業訪問時に撮影した写真を組み合わせながら、何とか作業を進めた。台本は、いつ、何処で、誰が、どの服を着るのかを一目で分かるように制作しなくてはならなく、全ての内容が決定し制作へ本格的にとりかかれたのは、ショー開催日まで1週間もなくなってからであった。



図 13 台本制作

## 8) プログラム制作

プログラム制作を担当した学生は4名であった。このプログラムの制作(図13)も、すべての構成が決定しなくては取りかかることが出来ない作業である。しかも作業量としては多く、制作、印刷を含めると、かなりの時間のかかる仕事であった。この作業については、久保村が学生の指導にあたったが、作業は夜中まで及んだ。実際、作業を開始できたのがファッションショー開催日の2日前で、全てが完成したのは当日の朝であった。プログラムは当日の朝、急いで手分けをして会場へ持っていった。

この様に順番で仕事を進めていくと、最後にしか出来ない仕事に、しわ寄せがきてしまった。初めから時間がないことが分かっていた為、外部に委託出来るところは委託すべきであったが、今回のように全く時間の余裕のない場合は、外部へ委託する時間すらも無くなり、結局は自分たちで行うしか無かった。そういう意味では担当者たちは大変であったかと思う。

## 9) ナレーター

ナレーターを担当した学生は2名であった。今回、ナレーターの仕事は話すだけではなく、話す内容も話す本人が考えることにした。又、この仕事もショーの構成が決まっていなくて作業に移れないので、作業が最後となり、学生はリハーサルの前までかかって話す内容を考えていた。

ナレーションは、いかに自分たちのコンセプトや思いを伝えることが出来るかを基本に考えさせた。又、今回は産・官・学の共同事業ということで、衣裳を提供してくださった協賛企業を、どのようにPRできるかに気を配った。

## 10) 照明

照明を担当したのは4名の学生であったが、照明機器の会社から来た業者の人は2名だけだったので、重い機器の設営から収納からまで、1年生に応援を頼みながら行った。(図14)この作業を通して学生は、華やかなショーの陰には、表からは見えないけれど、無くてはならない努力が一杯あることを体験し、学んだのではないかと思う。これらの裏方の仕事でも、機器の位置、向きのほんの少しの違いが、舞台全体に与える影響は非常に大きく、その少しを調整すると云った仕事は、やはり非常に難しいのである。



図 14 照明設営作業

## 11) 進行

進行を担当した学生は4名である。今回のファッションショーでは、モデルの出る場所を、プロモデル用と学生モデル用の2箇所に分けたので、緊密な連絡をとりながらの「キュー出し」に、学生たちは緊張していたようである。しかし、この役割に望んで挑戦した学生は、緊張しながらも生き生きと行っていた。



## 12) 記録

記録の担当の学生は4名であった。学生はデジカメ、カメラ、ビデオカメラ2台を、それぞれが担当し、リハーサルから本番まで、全ての映像を記録した。しかし残念なことに、ショーの最後に、全員が舞台へ集合し記録係も舞台へと並んだ為、最後に記録がとだえてしまった。(図 15)



図 15 フィナーレ

## 13) 受付

受付を担当した学生は2名だが、仕事は当日だけであった。(図 16) 仕事内容としては来客者の記帳、名刺の受け渡し、ショーの説明等であったが、当日はかなりの来客者であった為、対応に忙しかったようである。



図 16 受付係

## 14) 案内係

案内係は3名であった。係の基本的な仕事としては、ファッションショーの当日に来客者の誘導などを行う予定であったが、ショーが始まる前には、アクティブ G 内をパンフレット持って宣伝にまわっていた。

## 15) 会場設営

会場設営を担当したのは6名の学生で、矢口<sup>®</sup>、石松<sup>®</sup>指導の元、1年生も混ざって、前日の会場設営、ショー後の片付けを

行った。舞台の設営は、一応計画はしておいたものの、照明の位置などは、現場に行ってから会場全体の様子によって対応しなくてはならない。又、実際にリハーサルを行いながら、不具合な点があれば修正しなくてはならない。今回の設営では会場が比較的狭いので、椅子の配置によってモデルの歩きやすさ、見易さや、全体の雰囲気が変わるので、非常に神経を使っていた。

以上の様に、学生が沢山の役割を分担しながらファッションショーは進められ、当日のショーは大成功であった。(図 17)

(図 18) ショーは 14 時 30 分と 16 時 30 分と 2 回行ったが、立ち見客も出て、県の集計によると 400 名の入場者があったとのことである。今回のファッションショーは、学生はもとより、父兄、学長をはじめとする学内関係者、卒業生、岐阜県、岐阜市、アクティブ G、岐阜県産業文化振興事業団などの関係者、協賛企業 9 社の方々、それに多数のテレビ、新聞社等のマスコミ関係者、又、興味を持って頂いた一般人の来場も多かった。



図 17 学生モデル 1



図 18 学生モデル 2

## 5 ファッションショー後

ショーが終了した後、興奮のさめないまま全てを片付けを行った。片付けは、会場を片付ける班と商品やその他の物を短大

へ運ぶ班に分かれ行動した。

### 1) 製品の返却

ファッションショーの明るる日の朝から、企業への商品の返却を開始した。8日の朝に返却予定のものは、ショー終了後、すぐに学生が商品チェックを済ませ、セットを作っておいた。他のものは8日にあるファッションビジネスの時間に点検を行うことにした。製品の点検は9社の担当となった学生が中心になり、借り受け当初に作っておいた商品リストを見ながら、汚れなどがいないかを確認し、もし、あれば書き出し表にすべて書き込むようにした。又、ファッションショーの際に、肩パットをはずして着用した洋服には、必ずパットを戻しておくように注意を呼びかけた。

次に、借り受けた洋服を企業ごとにハンガーラックに掛け、返しに行く準備を行った。本来ならば使用されたショーの写真などをつけて返却をするのがマナーではあるが、今回の場合は、急いで返却をしなければならぬ製品ばかりなので、とりあえず担当者が中心となり手分けをして返却をすることにした。月曜日にはA社とB社、木曜日にはF社とG社とH社、金曜日にはC社とE社とI社へ返却をした。又、ある企業では貸し出した製品が急に必要になったと云うことで、授業中に連絡がはいり、すぐ昼に返却に向かったということもあった。(図 19) しかし概ね、どの企業へもスムーズに返却でき、学生たちの「ここが、汚れてしまいました」という報告も、優しく聞いてもらえたようである。

返却に向かった際、ある企業デザイナーは学生たちに「こんな良い経験はまたと出来るものではない。ほんとに良い体験だったね。」と、暖かくねぎらい、企業人、デザイナーとしての話など学生にして頂くなど、学生と現場で働いている企業の方々との交流が出来たと感じた。又、ある企業では自分たちの売っている商品が、ああいう着こなしができるのだと感動したと云う感想が聞かれた。



図 19 反省会

### 2) 感想

プロモデルを一部使用したことは、非常にショーが洗練されて見え、観客に喜んでもらえた様である。学生たちにとってもプロモデルの使用は前述の他に面白い反応があった。それは、リハーサルはすべて、当日係りの学生が手分けをして、モデルひとり分を5人に分けて着るくらいにして行っていた。そこで、モデル体験をして喜んだ学生もいたが、なにしろ学生の着こなしと、プロモデルの着こなしが違い、それにより、商品から受ける印象が異なることを見て、感嘆していた。(図 20) (図 21)

このショーを行うと決めた際、企業から借用した、商品の破損、盗難、などが一番心配であり、どの様な対応をすべきか検討を行っていた。又、授業の一環として行っている為、会場で火事、地震などのトラブルがあったときはどうするのか、商品ばかりではなく、学生の怪我や事故についても、傷害保険など学校の保証を確認した。しかし、これらは心配だけに終わりほったした。



図 20 プロモデルによるショー1



図 21 プロモデルによるショー2

### 3) 報道

今回の試みは大学の地域貢献の新たな形として、様々なメディアで取り上げられた。今回のファッションショーの目的の

一つとしては岐阜市立女子短期大学生生活デザイン学科による、地域への情報の発信と云う主眼もあった為、今回、どの様なメディアで、どの様に取り上げられたかを、以下に記す。

① 7月8日(月) 岐阜新聞 朝刊

「華やか、若さが躍動」アクティブGでファッションショー、岐阜女子短大生44人、岐阜モード着こなす

② 7月8日(月) 朝日新聞 朝刊

「メイド・イン・岐阜」着こなしキマった、短大生がショー

③ 7月9日(火) 中日新聞 朝刊

「若者の感性“ギフを着る”」地元のアパレル企業が協力、岐阜短大生華やかファッションショー

④ 7月10日(水) 日本繊維新聞

「GIFUを着る」ショーを開催、岐阜市立女子短期大学、産・官・学の一体化示す

⑤ 7月10日(水) 繊維新聞

「産官学でコラボレーションショー」

⑥ 7月12日(金) センイ・ジャナル

第1回ORIBE ワールド・コレ、若者が着る“GIFU”、岐阜アパレル製品を自在にコーディネート

⑦ 7月26日(金) 繊維新聞

がつこう・ひと、「ショーで大学と企業とを橋渡し」、岐阜市立女子短期大学生生活デザイン学科助教授伊藤陽子さん

⑧ その他、岐阜テレビ、テレビ愛知等

⑨ 8月30日(金) センイ・ジャナル

「TAKUMI 工房特別賞」を受ける。岐阜市立女子短期大学 生活デザイン学科。7月7日のアクティブG開設2周年記念イベントに、「第1回オリジナルファッションショー・GIFUを着る」を企画し、公演したことによる、集客、宣伝等によるアクティブGへの功績が表彰対象」で7月23日にアクティブG館長とTAKUMI 工房事務局より授与される。

### Ⅲ 結果・考察

今回のファッションショーを通して、学生、企業、大学にどのような影響を与えたかを、以下に述べる。

#### 1 学生に対する影響

今回のファッションショーを行ったことによって、学生がファッションショーの運営に自信を持った。これは単にファッションショーに限った事ではなく、学生の主体性、積極性が養われたからだ考える。

この「GIFUを着る」以降に学生が主体となって、「10月26日(土) 桃林祭ファッションショー」、「11月3日(日) ハートフルスクエアGのファッションライブラリーでの2回のショー」が、開催された。これらの活動に於いて、学生は自信を

持ってショーの構成をしていた。例えば桃林祭に於いては、ショー作品を募集する時点からシーン別に募集をし、ファッションショーを組み立てていった。又、この時の舞台でのウォーキングに関しても、非常に効率の良い舞台の使い方ができていたように見られた。おそらく、これらは「GIFUを着る」を通して学んだ成果なのではないかと思われる。

又、11月に行われたハートフルスクエアGでのショーに於いては、開催が急に企画され、非常に短い準備期間であったのにもかかわらず、ハートフルスクエアG内で、場所を変えて行われた2回のショーの舞台を、立派につくりあげていた。このショーの時には、伊藤が会場の下見に行った時も、学生たちは主体的に計画を立て、着々と実行に移しており、頼もしいという感じを担当者たちに与えていた。関係者たちからは「GIFUを着る」での体験が活かされ、みごとなショーだった。」との評を頂いた。

#### 2 企業に対する影響

今回、学生が企業を訪問することによって、学生と企業、大学と企業の距離が縮まったのではないかとと思われる。実際に協力企業の中から、大学に求人募集を送ってきてくれた会社があり、企業の大学に対する親密度が増したように感じられる。又、今年度すでに就職者が決定していたところからも、再び追加の求人がきて、生活デザイン学科の学生が就職を決定したところもあった。この他にも就職に関しては、今まで求人が来なかった様な企業や、以前には求人があったものの近年は途絶えていた様な企業からも直接、求人の問い合わせがあった。

又、協力企業と打ち合わせを行っていく過程で、企業側からインターシップの申し出があり、大学として今、実現しようと取り組んでいる最中である。

産・官・学の連携という、非常に高度な技術的な面での支援という事が行きがちであるが、今回のような草の根的な産・官・学の連携があっても良いのではないかと考えられる。現在はまだ、企業に対する貢献度はあまり無いと思われるが、この様に大学と企業とが地域という場に於いて、草の根的な活動を積み重ねることによって今後、もっと大きな活動に結実するのではないかと期待する。

#### 3 大学に対する影響

直接的な影響としては、今回の活動が新聞等で多く好意的に報道されたことによって「岐阜市立女子短期大学」、「生活デザイン学科」の知名度が上がったと思える。これに関しては実際に「新聞を見ました」と、手紙や電話、FAX等が多数あり驚いた。

また今回の活動を、今後、大学が地域の大学として活動を行っていく一つの試みとして、生活デザイン学科では考えてくれ、



大学の意識の変化に一石を投じたかと思われる。大学が従来の様に学内で留まっているのではなく、地域社会に積極的に飛び込み、大学の機能を還元することが、今後の公立大学の意義として、非常に需要になってくるかと考える。一言で産・官・学の連携と云うが、その実現の為の良い方策は、簡単には見つからないと思われる。しかし、今回のような試みの繰り返しと試行錯誤の中から、産・官・学の関係を、少しずつ積み上げていくしかないのではないかと考える。

#### 4 身の回りに対する影響

今回、偶然にも「GIFUを着る」を公演できたことは、様々な条件が偶然的に、タイミング良く揃ったことによるものではないかといえる。「たまたま岐阜県からの相談が来たこと。」「アクティブGという会場があったこと。」「岐阜市立女子短期大学生活デザイン学科が外に向かって、活動をアピールしようと努力していたこと。」「産・官・学の連携に対して生活デザイン学科が積極的であったこと、又、企業に良い理解者がいたこと。」「学科内に、このような企画に対し協力してくれ、実行する能力のある教員が揃っていたこと。」「外部に良き協力者がいたこと、又、生活デザイン学科に熱意のある素直で真面目な学生が揃っていたこと。」、等々である。しかし、これらは表面的にはタイミングが良く揃ったのかもしれないが、深い部分では、今までの様々な行為・実績の積み重ねによって、引き起こされた必然的なものとも言える。

#### 5 桃林祭に於ける「GIFUを着る」記録写真展

今回、桃林祭（大学祭）に於いて、ファッションショーのすべてのシーンを張り出したパネルによる写真展を開催した。この展示企画は、当日ファッションショーを見に来られなかった人には新鮮な興味を持たれ、実際にショーを見た来場者には懐かしさと共に再び感動を与えた。（図 22）そして、大学祭オープンキャンパスに訪れた受験希望者には、大学生活に対する夢と希望を与えられたのではないかと思う。もし、この夢と希望を持った学生が大学に入学したら大学は、より良く少し変わるのかもしれない。多分、このような小さな活動が結びついて、偶然が必然的に引き起こされるのではないのだろうか。



図 22 桃林祭パネル

#### おわりに

以上、小論では「GIFUを着る」というファッションショーを通して、産・官・学の連携による大学の地域貢献について実践・研究を行った。今回は実践報告という手法をとった為、事例研究にまでまとめきれたかは不安が残るが、産官学による連携の一つの試みとして、本年度中に文章でまとめるべきだと考え、小論を書き上げた。

ファッションショーという行為は、普段学生が行っている服を作るという作業だけではなく、ショーを企画し、準備・実施と、多くの人々の共同作業によってのみ成り立つものである。学生は今回のファッションショーを通して、服を作るという作業だけでは得られない何かを学び取ってくれたのではないかと思う。

最後に、ファッションショー「GIFUを着る」の開催にあたって参加・協力して頂きました学生、各先生方、衣装を提供して頂きました地元のアパレル企業の皆様方、この企画を共同で主催して頂きました岐阜県の関係者の方々に感謝致します。



図 23



図 24

## 註

- 
- ① 経済企画省, 平成 12 年度版経済白書, 大蔵省印刷局, 2001, p.258
- ② この様な地方の抱える問題について、下平尾は以下のように述べている。  
 県外の進学率が増加し、卒業後、地元に戻らない人が増加していけば、高等教育機関の不足から若年層の流出が増加し、将来における地域の活力の低下が危惧されるのである。かつては地元で働くべき企業が不足していたので、中学、高校卒業後おびたしい若年層が流出し、地域の経済的發展を阻害してきたが、今日においては、企業誘致がすすみ、新しい産業も発達し、地域内雇用が拡大し、所得水準も上昇した結果、大学等への進学率は年々上昇していくが、地元で大学がないために若年層が親の経済負担によって流出しているのである。中長期的にみれば若年層の流出は地域の経済的發展のみならず地方分権下の人材育成全体にとっても看過できない重要な問題となっている。  
 下平尾勲, 『構造改革下の地域振興』, 藤原書店, 2001, p. 219-220
- ③ ここで云う「強い大学」大学とは、「入試に強い大学」、「就職に強い大学」、「教育に強い大学」、「研究に強い大学」そして「経営の強い大学」の事である。  
 大学の改革については、以下の本を参考にした。飯田泰三(他), 『日本の大学の現在－現場から』, 『大学革命』, 藤原書店, 2001, p.106-149
- ④ 清川忠男, 「補遺－地域と大学」, 『地域における大学の役割』, 日本経済評論社, 2000, p.161-163
- ⑤ 岐阜市立女子短期大学 生活デザイン学科 助教授 伊藤陽子
- ⑥ 最終的にはモデルの人数は予算の関係上、6 人であった。
- ⑦ 岐阜市立女子短期大学 生活デザイン学科 助手 平真由美
- ⑧ (有) ヴェレーザ 代表 沖侑宇子
- ⑨ 岐阜市立女子短期大学 生活デザイン学科 講師 久保村里正
- ⑩ 岐阜市立女子短期大学 生活デザイン学科 講師 矢口直道
- ⑪ 岐阜市立女子短期大学 生活デザイン学科 講師 石松丈佳  
 (提出期日 2003 年 3 月 5 日)